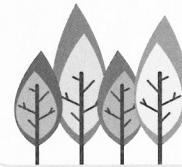


# 生きる意味 生きるから

## 「やられたらやり返す」という人間関係から生まれるもの

第10回



花園大学

はし もと かず あき  
橋本和明



この「やられたらやり返す」という人間関係について、ここで少し立ち止まって考えてみたい。

近年、わが国はアメリカに倣い訴訟時代に

「やられたらやり返す」、「倍返しだ」で高視聴率を記録したドラマ『半沢直樹』をご覧になつただろうか？ 堀雅人が演じる銀行員の主人公・半沢直樹が不正を明らかにしようとするため奮闘する。しばしば上司からおとしめられるが、危機一髪のところで反撃し、勝利を勝ち取る。視聴者は、敗者の立場から勝者に逆転する物語の展開のスリリングさに魅了され、「やられたらやり返す」という爽快さに取り憑かれる。

突入した。ちょっとしたトラブルでも、すぐにそれが裁判所の法廷論争にまで発展してしまう。そういうケースを見てみると、紛争がいつまでたっても出口を見出せずに長期化する。そのうち、どちらが被害者か加害者がさえわからなくなる。これは大人だけの世界に限ったことではない。学校現場を見渡すと、子どもが置かれている事情は大人と変わらない。いじめの現象がまさにそれを物語っている。いじめられていた者が何かの拍子でいじめる側に回り、いじめの加害者がアッという間に被害者に転じる。この移り変わりの激しさに、子どもたちはいついじめる側、もしくはいじめられる側に置かれるかわからぬ場合がほとんどである。

ず、大きな不安を抱く。私の専門分野である臨床現場においても、しばしばこの「被害と加害の逆転現象」に直面させられる。例えば、子ども時代は親からのひどい虐待の被害を受けてきた者が、今度は自分が親になるとわが子に虐待をしてしまう。いわゆる「世代間伝達」というもので、そこには本人は意識していないとも、「やられたらやり返す」という構図に知らぬ間になつてしまふ。あるいは、そのような被虐待児は思春期以降、他者に暴力を振るうという加害者に姿を変えるかもしれない。その場合も、本人はいつ被虐待児から非行少年に変身したのか自覚がない場合がほとんどである。

この「やられたらやり返す」という人間関係は、ある意味、現代の人間関係の特徴を示すものと言えるかもしれない。一昔前なら、権力者と非権力者が明確に区別され、不正があつても弱い者は泣き寝入りをさせられたいた。その時代には人権が軽視され、悪がはびこりやすい社会の制度があつたといえる。その意味では、半沢直樹まではいかなくても、それなりの悪や不正を明るみに出せる社会は望ましいことといえよう。

いじめについてはどうであろうか？  
一昔前のいじめは、『ドラえもん』に出てくるのが太とジャイアンの関係が典型的であった。つまり、のび太はいじめられっ子、

かもしれないが、紛争を次々に誘発させ、不安感を増幅させる面も併せ持っているといえる。あるいは、相手に上下座をさせて屈辱を負わせることで、こちらの気分を発散させる。この人間関係から生まれるのは、被害と加害の連鎖であり、あるいは終わりの見えない紛争であり、落ち着く先のない疲弊した心へと行きつくのではなかろうか。

ほんの四半世紀前にさかのぼれば、人に多少迷惑をかけて、「お互いさま」と言い合っていた。一人では生きていけないとわかっていたので、「持ちつ持たれつ」というギブ・

ジャイアンはいじめっ子という立場がほぼ固定されている。現代のいじめに見るようには、いじめっ子といじめられっ子がコロコロ変わることはない。その固定した関係が先ほどの権力者と非権力者の関係のように、一種の安定感を抱かせるところもあつたに違いない。断つておくが、いじめられっ子は常にいじめられるのをよし、いじめっ子は常にいじめるのをよしと言っているのではなく、現代のいじめは、加害と被害が容易に逆転してしまうところに強い不安感が煽られると私は言いたいのである。

こんな風に考えると、「やられたらやり返す」という人間関係は、確かに爽快さを伴う

を尊重し、多少のことは大目に見て、和を尊しとする関係が生きていた。今はどこかそれが薄らぎ、関係の希薄さのなかで被害と加害がぐるぐる回っているようにさえ感じられる。「やられたらやり返す」という関係から生まれるものは何なのかをもう一度、考えてみたいものである。今ひとつ冷静になつて、「お互いさま」「持ちつ持たれつ」の関係とそれとを比較してみたい。

橋本和明  
大学を卒業後、二十以上も家庭裁判所で調査官として勤務し、少年事件や家事事件などの非行や虐待などの臨床に携わってきた。二〇〇六年から花園大学に奉職。臨床心理士。